

No. 1259

氷上の花 —プロフィギュアスケート—

日本ではじめてのプロフィギュアスケートショーが2月18日から東京・品川のスケート・センターで開かれました。チヨウのように自由に舞う福原美和。1977年の世界選手権大会でフリーの部で優勝し、プロに転向した佐野稔。後方宙返り、トリプル・ルッツに大きな拍手とためいきがもれます。

「技術追求のアマ精神を失なわないように頑張りたい」と言う佐野。佐野は今、4月末に来日する「ホリデー・オン・アイス」のゲスト出演に思いをはせています。

伝統を守る —東京・武蔵村山—

きめこまやかな美しさの中に素朴な味わいを持つ村山大島紬。武蔵野の面影を残す東京・武蔵村山市、こののびやかな風土の中で村山大島紬は織り継がれている。ここの紬のいのちは糸を染め上げるのに使う拵板にあるという。拵板は模様をミゾに置きかえて作る。木目に直角にミゾを彫る仕事は少しの誤差も許されない。熟練するまでかなりの年月がかかり、手間賃が安いことからこの仕事が出来た人は少なくなった、この道40年の福井さんはそのひとりだ。糸を拵板の間にはさんで材料を注ぎ込んで染める。拵板方式と呼ばれる染め方だ。板の締め方で模様がいくつにも変る。ここに村山大島紬が生き残ってきた秘密があるという。内野さんは「技術を取得するまで3年はかかる。染料のかけかた時間の判断は特にむずかしい」と語る。村山織物は明治初年に生れた。以来、その灯は何度となく消えかかった。しかし、人々はそのたびに情熱をかきたててその灯を何倍にも大きく輝かしてきた。手織りをする人がまだ残っている。静かな武蔵野におさの音だけが吸い込まれていく。1反仕上げるのに10日から20日かかる。こうしてあの美しい光沢のある紬が生み出されていく。紬を生みだし、育ててきたのは土地の人々だった村山大島紬にはただ仕事を愛する人々の汗と努力と情熱が織り込まれている。